高等学校第１学年　Ｅ　球技　ア ゴール型「サッカー」　※ここではサッカーのみ紹介します。

単元の目標

知識及び技能	安定したボール操作と空間を作り出すなどの連携した動きによってゴール前への侵入などから攻防を展開できるようにする。
思考力、判断力、表現力等	攻防などの自己やチームの課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、考えたことを仲間に伝えることができるようにする。
学びに向かう力、人間性等	課題を共有して互いに助け合ったり教え合ったりすることや互いに合意した役割に責任をもって自主的に取り組むことができるようにする。

※共：単元全時間を男女共習で実施

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
導　入	準備運動　共：（１）全ての生徒が競技の特性を理解し、ゲームを楽しむための工夫 ・心と体をほぐす準備運動の提示 ～サッカーエクササイズ（WANIMA「やってみよう」３分間）～ ※ボールを持って音楽に合わせ、８呼間×２の動きを５つ×４行う。８時間目以降は、５つ目の動きと最後のポーズをチームで考える。											
展　開	練習 ・ボール操作における課題解決につながる練習方法のの提示 a ２人正面パス b ５vs２のパス回し c １人課題練習 ・意欲的な態度への称賛及び、技能習得のための個別支援			練習 ・ボールを持たない動きを高める練習方法の提示 d 鬼ごっこ e ２対１突破ゲーム ・よい動きに対する称賛及び、思考を促す問いの提示				練習 ・チームの課題に応じて、a～eの練習を自分たちで選択して行う時間の設定 共：（２）動きの課題について、生徒同士が考えを伝え合うための工夫 ・適切な練習方法選択に対する価値づけ				
	ゲームへの準備 ① ミーティング（戦術確認）　②役割確認											
	ドンドンルールゲーム 共：（１）全ての生徒が競技の特性を理解し、ゲームを楽しむための工夫 ・全員が積極的にボールに関わるためのゲームの提示（少人数・男女混合３チーム）　ゴール横ゾーン通過→1点　ゴール→10点 共：（２）動きの課題について、生徒同士が考えを伝え合うための工夫 ・他者と主体的に関わるための振り返りの設定（ルーブリックを基にして、自身のプレイと仲間のプレイを振り返る）						リーグ戦 共：（１）全ての生徒が競技の特性を理解し、ゲームを楽しむための工夫 ・全員が活躍できるゲームの設定（男女混合３チーム、適切なコートの広さ、試合時間等） 共：（２）動きの課題について、生徒同士が考えを伝え合うための工夫 ・他者と主体的に関わるための振り返りの設定（ルーブリックを基にして、仲間のプレイを振り返る）					
終　末	振り返り、タコナライズの結果 ① ペア、トリオごとによる振り返り　② チームごとによる振り返り　③　全体での振り返り											

知識・技能				①				③		②	総括的評価
思・判・表		①							②		
主			①				②				

評価規準

【知識・技能】
① 安定したボール操作ができる。
② 仲間がパスができる位置に動くことができる。
③ 相手がボールを持ったとき相手の攻撃を遅らせるために動くことができる。

【思考・判断・表現】
① 分担した役割の成果などについて自己の活動を振り返り、課題をシートに記述している。
② 自己や仲間の課題について思考し判断したことを、他者にわかりやすく伝えている。

【主体的に学習に取り組む態度】
① 気温の変化に応じて準備運動などを十分行っている。
② 互いに練習相手になったり仲間に助言したりして、互いに助け合ったりしている。

実践事例

生徒同士が考えを伝え合い、ゲームを楽しむための工夫
高等学校第１学年　Ｅ　球技　ア　ゴール型「ハンドボール／サッカー」

１　単元の目標

○技術の名称や行い方、体力の高め方、運動観察の方法などを理解するとともに、安定したボール操作と空間を作りだすなどの動きによって、ゴール前への侵入などから攻防をすることができるようにする。【知識及び技能】
○攻防などの自己やチームの課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。【思考力、判断力、表現力等】
○球技に自主的に取り組むとともに、一人一人の違いに応じたプレイなどを大切にし、互いに助け合い教え合うことができるようにする。【学びに向かう力、人間性等】

２　共生を基盤とした授業づくりにおける仕掛け

（１）全ての生徒が競技の特性を理解し、ゲームを楽しむための工夫

①準備運動の工夫

通常、準備運動としてラジオ体操を取り入れているが、本実践においてはＷＡＮＩＭＡ「やってみよう」の曲に合わせ、ボールを使ったエクササイズを行った。この曲は、ラジオ体操同様３分間の長さである。前奏を除いて１６呼間ずつ５つに分け、生徒がハンドボール、サッカーの特性に似た動きを味わうことができる動きを取り入れた構成にした。

②教具の工夫

特にサッカーにおいては、足でボールを操作することから、ボールを蹴る経験が乏しい生徒は苦手意識が高い。また、ボールを蹴ったり、ボールが当たったりすることで恐怖心をもつ生徒も多い。そこで、新聞紙を丸めて作ったボールをゲームの際に使用した。このボールは、通常のサッカーボールに比べ転がらないため、簡単にボールがコートの外に出ることがなく、そのため生徒のプレイ時間が上がる。そこで、このよさを生かし、生徒が「ゴール型」球技に必要な動きを習得し、徐々に慣れてきた時点で通常のボールを使用するようにした。通常のサッカーボールを使用する際も、ボールの空気圧を低くし、生徒が柔らかさを感じるように工夫した。このような工夫をしたことで、ゲーム中に生徒が意欲的にボールを追いかけたり、仲間がボールを持つと積極的にボールを受けようとしたりするシーンが多くみられた。

③ゲーム時におけるルールの工夫

ハンドボールの試しのゲームにおいては、女子がほとんどボールに触ることができなかったり、男子の中でもシュートを打つ生徒は限られたりする状況であった。そこで、全員が意欲的にシュートを目指してプレイすることができるように、シュートしてボールがキーパーに防がれたり、ポストに当たったりしたら１点、ゴールに入ったら１０点というルールでゲームを行った。このルールの設定により、生徒は、「０点で終わらない」を合言葉にしてゲームに臨むことができた。

（２）動きの課題について、生徒同士が考えを伝え合うための工夫

まず、オリエンテーションでは、「体育の授業は部活と違う、町のスポーツサークルのようにその競技が好きな者たちの集まりで、みんなでさらに好きになろう」という言葉をかけ、生徒同士が共感的な雰囲気の中で、お互いが気付いたことや考えたことを伝え合うことの必要性を伝えた。加えて、ゲームの際は、「遠慮はしない、配慮はしよう」という言葉掛けを行い、生徒全員がそれぞれの技能を発揮し、かつ楽しくゲームを行うことができるようにした。これにより、男子に女子が積極的に守備に行ったり、ボールをもらったり、また女子が男子にアドバイスする姿が見られた。

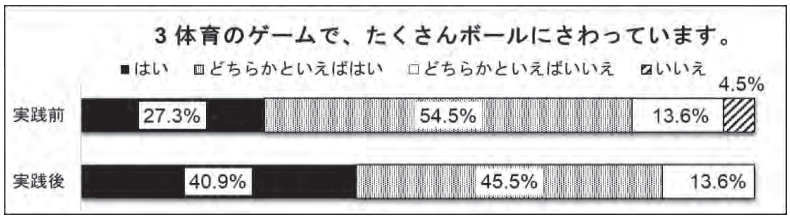
次に、生徒同士が、男女、能力差関係なく互いに気づいたことを伝え合う場を設けた。ハンドボール、サッカーともに３チームに分けゲームを行い、休憩チームがゲームをしている一方のチームの選手の動きを一人ひとりがチェックした。チェックした内容は、ハンドボール、サッカーともに、ボールをもっていないときの動きである。指定された動きのルーブリックをもとに、そのルーブリックの動きを担当した生徒がゲームの中でどのくらい行ったかを確認し、試合後伝える形をとった。また、感じたこともアドバイスとして伝えることを促した。

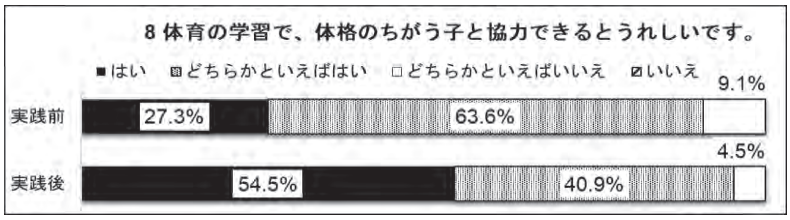
攻撃時におけるボールを持たないときの動き「仲間がボールを持ったときに…」	
A	仲間がパスを出せる位置に動き、パスを声や身振りで要求している。
B	仲間がパスを出せる位置に動いているが、要求していない。
C	仲間がパスを出せる位置に動いていない。
守備時におけるボールを持たないときの動き「相手にボールが渡ったときに…」	
A	すぐに守備に移っている。
B	守備に移っているが、すぐではない。
C	歩いて戻っている。または守備に戻らない。

３　成果と課題

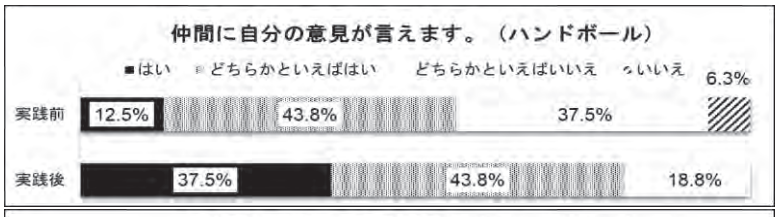
（１）成果

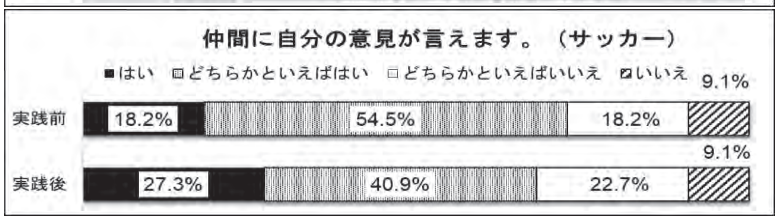
○　サッカーの実践の前後に行った「体育の学習に関する生徒アンケート（21 項目質問紙アンケート）」において、「体育のゲームで、たくさんボールにさわっています」について、「はい」と回答した生徒は、実践前：27.3%から実践後：40.9%に上昇している。また、「体育の学習で、体格の違う子と協力できるとうれしいです」についても、「はい」と答えた生徒が実践前：27.3%から実践後 54.5%に上昇した。このことから、新聞で作ったボールを使って学習を進めたことは、ボール操作の経験の差に関わらず、生徒が積極的にボールを操作しようとする意識を高める上で有効であった。





○　攻撃時／守備時におけるボールを持たない動きについて、ルーブリックを用いて生徒同士が動きの様子を伝えたり、よい動きについて考え合ったりする活動を設定したことで、「体育の学習では、仲間に自分の意見が言える」について、「はい」と回答した生徒がハンドボール、サッカー共に増えた。また、仲間からのアドバイスをもとに、ボールを持たないときの動きをどう改善するか繰り返し考え試すことで、実践の後半では、ハンドボール、サッカー共に、ゲームにおいて仲間と連携した動きがよく見られた。



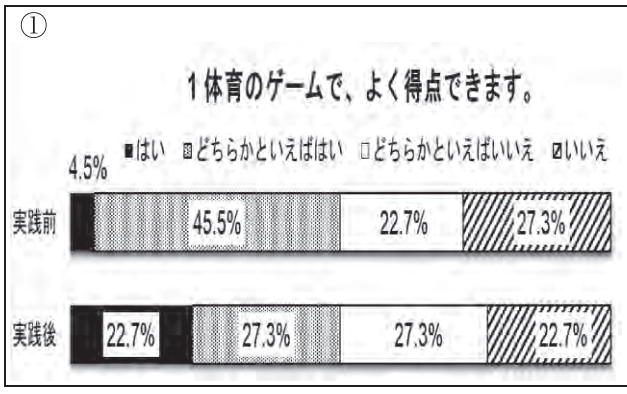


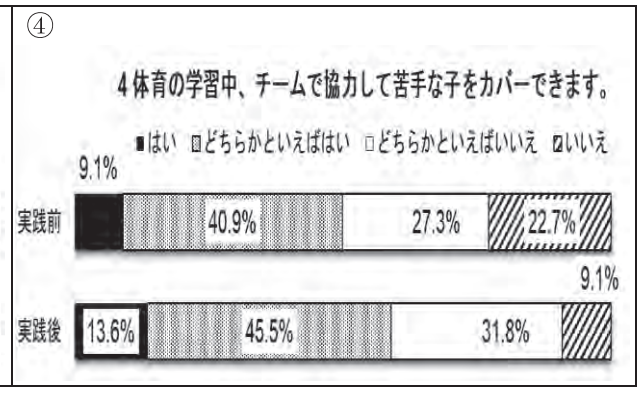
（２）課題

●　球技の特性を楽しむための工夫を行いながら実践を進めたが、球技の醍醐味である「得点する」という感動を多くの生徒に充分に味合わせることができなかった。今回の実践で生徒が身に付けたゴール型の動きを、男女、能力差関係なく仲間と連携した動きに発展することができるように、次年度の学習に生かしていきたい。

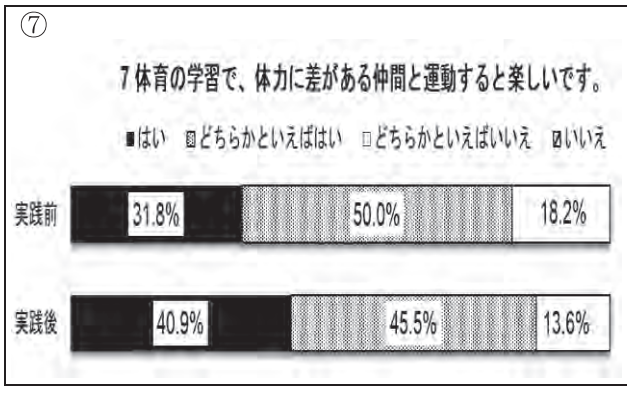
【児童生徒の変容】

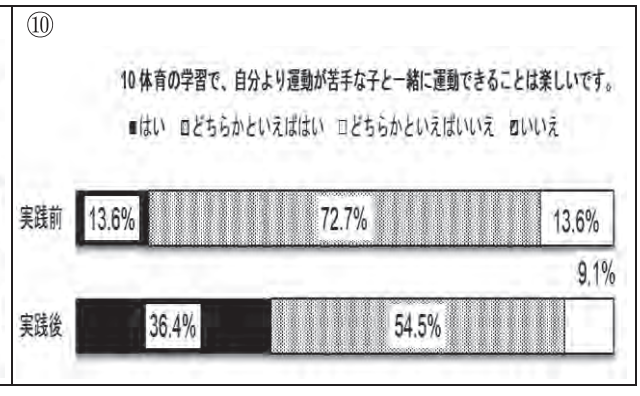
〔Ⅰ　リーダーシップ〕



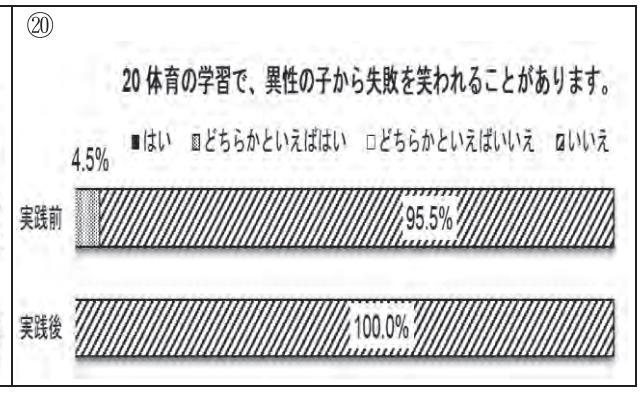


〔Ⅱ　ちがいの受容〕





〔排除雰囲気〕



【授業実践協力者の声】

実践を通して、生徒には「遠慮はしない。配慮はしよう。」と伝えてきました。
学校、学級の雰囲気が体育の授業を通して、落ち着いてきたように感じています。